

コロナ禍は、とうとう一年を越えてしまいました。
今冬は、大雪の被害も各地で厳しいようです。それでも、春は急ぎ足でやってきています。日本文化塾の本部には、咲き出した梅の花を目指して、たくさんの鳥たちが訪れてきます。日向に伸びたミモザの枝にも、ふかふかの思わず抱きしめたくくなるような花房が揺れています。

☆2020年度の活動報告

*HP 上に参加者の貴重なご感想を掲載しておりますので、終了後逐次ご覧ください。
<http://www.nihonbunkajuku.org>

オンライン講演会 映画『ゴジラ』から見る戦後史私観

—映画監督岡本喜八と『シンゴジラ』が会うまで—

映画史研究家 寺島 正芳氏

2020.9.26 14:00～16:00

2020年6月に予定していた本講演会は、新型コロナウイルス感染症の拡大への公の対策に沿って、実施可能な時期を探りつつ、準備を進めていました。数回にわたり、日程を定めましたが、その都度予約した会場が閉鎖となり、一堂に会しての形態が不可能となりました。その間、講師には大変、ご心配とご迷惑をおかけし、心苦しい限りでしたが、辛抱強くメールとお手紙での打合せを繰り返してくださりながら、時期を待っていただけただけには深い感謝あるのみです。最終的に、9月に至ってオンラインでの講演会が実現しました。お申込みいただいた参加者には、事前に講師が提供された詳しいレジュメをお送りし、講演に備えていただきました。以下、そこから引用し、概要をご紹介します。

はじめに

我が国初の本格 SF 映画と称され、戦後日本映画史にその名も残る東宝作品『ゴジラ』（1954・本多猪四郎監督 1911～93）を映画史面、近現代史面及び近代精神史面から分析、論評し、日米両国の論説も紹介しつつ、この作品が怪獣映画、SF 映画という単純な位置づけや枠を超えて、今日まで残っている意義を戦後史面、精神史面、サブカルチャー方面等から解説する。

合わせて研究対象としている戦後日本映画界が生んだ最大の個性派監督・岡本喜八監督（1924～2005）がこの『ゴジラ』と見えない縁を保ち、没後、『シン・ゴジラ』（2016・庵野秀明監督）に奇跡的（！）に関わる（写真出演）までの知られざる軌跡とエピソードも紹介する。

1. 日本及び諸外国の SF 映画について—その黎明期から現在まで

戦前の日本映画史を改めて概観して、果たしていわゆる SF 映画というジャンルが確立していたか、断定や断言は心もとないのだが、つぶさに見ると、その萌芽的作品は散見するので、いくつか紹介してみたい。→『月世界旅行』『ロストワールド』『キングコング』『透明人間』等→戦前の日本の SF 的作品

■総評的まとめ

SF 映画としての要素や個性は、当時の邦画よりもむしろ洋画にその先駆性、独創性が

感じられる。現在の精巧な SFX や CG 表現から比べると、その特殊撮影やミニチュア等に時代の古色は感じてしまうが、奇想天外さやイメージの豊かさは、現代と比べて遜色はなく、どうしても洋画に軍配が上がる。その証拠に上記の作品群は何度もリメイクないし類似傾向作、あるいは続編が次々と作られ、今日も映画史の古典として、不滅の輝きを失っていない。

邦画の SF 映画の黄金期はやはり戦後であり、円谷英二特技監督の才能が東宝の関係者（田中友幸プロデューサー・本多猪四郎監督ら）との幸福な邂逅により、より開花したことは間違いない。しかし、『ゴジラ』の大成功が逆に代えて巨大怪獣路線に作品を固定化させてしまい、SF 的作品—『地球防衛軍』や『妖星ゴラス』、『ガス人間第一号』のような変身人間シリーズ—などもあることはあったが、のちの『ウルトラマン』の巨大変身ヒーローや怪獣ブームで、ほぼ今日までそれに終始する経緯をたどることになった。東宝が『シン・ゴジラ』まで作り続けたことが何よりの証左とも言える。今日の日本映画の描く内容は、格差やコロナといった厳しい社会状況やそこに生きる人間の心理劇中心で、SFに限らず、夢や面白さを売る娯楽映画は少ない。それも時々刻々と変わる社会情勢を反映する映画の特徴ではあるが—。

2. 『ゴジラ』という作品について—戦後日本映画史から見る位置づけ

時代状況のまとめ

朝鮮戦争特需はあるも、まだ高度経済成長期以前であり、戦後の混沌は続いていた昭和23年（1948）から続く吉田茂長期政権は、日本独立（サンフランシスコ講和条約 1951年9月）を果たすなどの功績はあるも、疲弊、ほころびが目立つようになる第三世界の伸長と東西冷戦、国際情勢の変化→日本は自由主義体制と反共路線の下、経済大国の歩みへ。映画の製作背景と時代の状況把握の大切さ—この視点から『ゴジラ』という映画を見ていきたい。

■『ゴジラ』

1954年11月3日公開 東宝作品

東宝系 黒白 35mm 10巻 2683m 1時間37分

■戦後日本映画史から見て

（『ゴジラ』に関わった関係者について説明し、多くのコメントが紹介される。）

○当時の反響—その批判と批評から

『ゴジラ』は都市論や社会問題といった様々な側面が結びつけられ、当初のゲテモノ作品扱いから変化を遂げ、広い視野と観点から、見直し（再評価）の機運につながっていく。芸術映画（黒澤明・小津安二郎・溝口健二・成瀬巳喜男・大島渚・今村昌平ら）より娯楽映画として外貨を稼いだ事実（史実）も非常に重い。

後世の再評価と共に研究書、ムックは膨大な数に上るが、中身は玉石混交。

（さらに、講師は講演の中心部へと、お話を進められたのですが、紙面の都合で詳細にご紹介する余裕がないことをご容赦ください。）

3. 岡本喜八と『ゴジラ』の知られざる関係—なぜ出演に至ったのか

■戦争を生涯のテーマにした岡本喜八監督と戦争の申し子ゴジラとの出会いの意味

→戦争の協力者・被害者としての反省及び贖罪

岡本喜八が所属した東宝は『ゴジラ』の東宝でもあり、岡本監督も“ゴジラ”とは間接的に関わり続けたとも言える。もしくは無視できなかったという、知られざる新事実

4. 戦後日本近現代史から見て

■戦争、原爆、反核、戦後史の繁栄面の影、影響

・各種文献から見る戦後原子力開発史の光と影

5. 戦後日本近代精神史から見て

■巨大怪獣に仮託された“影”とは何か

- ・1950年代という時代、冷戦→敵の不可視性、見えない恐怖（見えざる敵）の可視化（巨大怪獣）と恐怖症の加速を呼ぶ

■異形の怪物＝神、「ゴジラ」と英語名「Godzilla」の語感、民俗学的観点（大戸島神楽）

- ・巨大怪獣の出現と現実性→畏怖の念→邪神（Godzilla）として意識
アメリカの幻想怪奇作家ラブクラフトが提示した人類登場以前の古代の邪神の存在を意識したか？
- ・ゴジラと日本神話の関係

ゴジラの祖とは一体何か→原作者香山滋の南島竜神伝説→ヤマタノオロチ（八岐大蛇）ら八百万（やおろず）の神々→神々への畏怖、鎮め、ケガレの清め（お祓い）→神楽へ

■戦後日本の恐竜ブームと『ゴジラ』

核の存在と巨大生物の出現のリアリズムへの共感→恐竜と怪獣の併存、混合が、戦後の恐竜ブーム、巨大サブカルチャー市場へと結びつく

6. まとめ—終わりに当たって

講師の結びの言葉：※『ゴジラ』が“神”なら今後も“不滅”であろう。人類の警告者として—

・作品『ゴジラ』から結局、何が導き出されるのか？→ 関係者や研究者の証言からみる…この映画の背景、つまり当時の社会的なコンテクスト（筆者注：文脈という意味であるが、ここでは『ゴジラ』が作られた当時の社会的背景や環境、その言葉が持つあらゆる関連する言語的知覚を意味する）とは、日本はなお広島や長崎に投下された原爆によって被害をうけていたという状態である。（中略）これ（原爆投下）が国民の心の中に放射能に対する不安を植え付けたのだ。9年後、第五福竜丸がアメリカのビキニ環礁での水爆実験のために放射能の新たな犠牲になったのだ。…私は誕生の頃からゴジラのことを考えると、ゴジラは神によってこの世に送られた神聖な獣、日本語で言えば『聖獣』と思わざるを得ない。それは恐ろしいものであったかもしれないが、人類と交わり、メッセージを運ぶことができる「魔法の竜」なのかもしれない。＜2014年、宝田明インタビューより＞（『アメリカ人の見たゴジラ 日本人の見たゴジラ』池田淑子編著 160頁）

…ゴジラという存在は、日本人の長きに渡るさまざまな不安を映し出し、とりわけ畏怖の念を抱かせる突発的な自然の脅威に対する日本の根深い脆弱性を表現の対象としてきたものである。（『アメリカとゴジラの半世紀』ウィリアム・ツツイ著 24頁）

■戦後日本の思想対立、映画史的流れから見る評価の変遷から見る→

単なる娯楽映画、怪獣映画から脱脚、純化（特化）へ

■『ゴジラ』というフィルター（キャラクター）を通して、改めて考えてほしいこと

→映画史的には、新規配役とかつての関係俳優とのバランス、踏襲を希望したい

かつての映画黄金期と現在の映画状況を隔絶・断絶させてはいけない

→つなぐ・伝えること

☆当日、画面で紹介された懐かしい俳優の写真等の画像データを講師のお許しを得て、CDとしてお分けしています、まだ、残部ございますので、ご希望の方はご連絡ください。

（文責 KS）

第60回 日本文化塾（第4回京都企画）

“紅葉とお料理で京の香りを感じて”

2020年11月15日（日）

—ボンクラ「史学の徒」の京都見学 田淵正和—

手元に、平等院鳳凰堂の阿字池前と「上林茶舗」の額がかかる長屋門の前で恩師とともに写った写真があります。30数年前、恩師の大学院授業で、豊前小倉の藩主（のち熊本藩へ）であった細川忠興（三斎）の書状綴り（「御案文」といいます）を解説していました。細川忠興は千利休の高弟（利休七哲）の一人で、茶人としても有名でした。その忠興の書状のなかに「上林三入」が登場していたため、学会が調査の後か記憶がなくなっているのですが、立ち寄った際の写真です。10年程まえに鬼籍に入られましたが、歴史を追究する面白さを“厳しく”教えていただいた大好きな恩師です。今回の企画の見学先に「上林三入」とありましたので、懐かしくなって思わず“行く！”と決断した次第です。

いざ出発！京都の企画といえば塾の理事須澤先生。晴天に恵まれた京都駅から、貸し切りバスは一路世界遺産の平等院へ。コロナ禍とあっても観光名所はさすがの人出（これでも人出は少ないのでしょうか）、鳳凰堂前で30年前を思い出してスマホで一枚と写真を撮ろうにも人・人…！ たっぷりの見学時間で、鳳翔館は初めてでしたが、ダークな色調に照明が効果的で、国宝・重文をはじめ御茶の上林のルーツにつながる資料も展示されていました。最新のデジタル技術を取り入れ“金掛かっているなあ”と、かつて地方博物館に携わった筆者としては羨ましいかぎりのミュージアムでした。

平等院表参道の一角にある京料理「竹林」で昼食。秋の味覚のひと品ひと品は全部美味しく、やっぱりビールを飲むべきだったな！

至福の時を満喫したら、次は同じく表参道に面したお茶の三星園上林三入本店へ。筆者の見学の目玉！です。30年前は、こちらではなく上林春松店（記念館）に入ったと思いますが、記憶が定かではありません。2階の資料展示室では、16代目ご当主のウィットに富んだ語り口で上林の歴史をお話しくださった。寛永時代と思われる書状が展示されていて、かつての勉強の続きをと思ったのですが、如何せん、なかなか読めなくて、一人残っているのに気づかず“もう次に行く？”と、ボンクラは時間不足のせいにするのでした。初めてのお抹茶づくり体験も楽しみの一つでした。

次は東福寺へ。バスから降りて結構な距離を歩きましたが、途中に「インスタ映え」するスポットもあって、けっこうな人だかり。さすが、伊達に歩かされませんね。東福寺本坊庭園（東西南北4つの庭）の作庭について、庭園デザイナーの鳥賀陽百合さん（ゲスト）から興味深い解説をしていただきました。「現代」の作庭家である重森三玲がつくったと説明がなければ、京都巡りでありがちな「古刹の枯山水」で終わってしまうところでした。

日が暮れた最後の見学先は世界遺産 東寺。ライトアップされた五重塔は、何百年前から変わらない静寂の姿を浮かび上がらせていました。



駆け足で見学先を辿ってみました。以下にボンクラの興味的発見を2～3補足しようと思います。

平等院では、慶長年間に死去した上林家の久茂と政重が葬られていると資料にあったので探したら、浄土院境内の一角に子孫が建立した記念碑が確かにありました。天気が良すぎて反射し碑文がよく読めませんでしたが、側面の建立者名は「上林竹庵定政」と「上林又兵衛定武」と読めます。両名は上林家の2代目久茂の末弟政重が別家独立した旗本の後裔で親子になりますが、資料では息子は「定武」ではなく「政武」となっているのです。政武は宝暦2年（1752）に没していますが、あるいはそれ以降の何時か碑を建て替えた？ 際に字を間違えたとも考えられます。何かあったのか？ と考えめぐらすのも楽しいですね。

※上林家は長男久茂（旗本代官・宇治茶園支配）・2男紹喜（味卜・茶師）・3男秀慶（春松・茶師）・4男政重（旗本代官格・宇治茶園支配）の4家が成立して江戸時代を継いでいきます。三入家は、資料的には久茂の長男勝永の子平入が2代将軍秀忠時代に御茶御用を拝命した家ではないかと（三入家の史料などを調べれば詳細が判明すると思います）。

また、浄土院には、重要文化財の養林庵書院の庭は細川忠興の作といわれる旨の解説板もありました。上林久茂の長男勝永は千利休の養女を妻にしたと資料にあり、細川忠興は利休七哲の一人で……と、「史学の徒」はかつての研究時代に思いを馳せるのでした！

上林三入本店で、2階資料室へ上る階段の登り口に「春日局」の手紙が展示されていましたが、気づかれましたか。そして、上に書きました展示室の寛永時代と思われる書状の宛名の一人は、かつて論文に取り上げた旗本ではないかと、少しびっくりです。

皆さんがご存知の名前がちらほらと出てきて「宇治茶（上林）」となれば、風流な茶の湯の場面が広がってくるのではないのでしょうか。しかしながら、ボンクラ「史学の徒」はそうではなく、手紙に表れる人物たちは茶の湯を楽しんだことは間違いないでしょうが、内容がお茶に関することであっても、それは「茶の湯」の世界ではなく、「政治」の世界の話だと思のです。第3代将軍家光の時代、幕府は体制を強固にするため大名の改易や減封などを盛んに行っており、大名たちも自家存続のために有力な旗本達に伝手をもとめて幕府の情報を集めていました。先に紹介した細川忠興の「御案文」もそうですし、春日局は自身が権力者であり息子は老中稲葉正勝です。上林家が「ただの御茶師」でない所以もここにあると思います。

少々駄文を書き連ねてしまいました。今回の見学会は、始発で地元（茨城県取手市）を出発するやや強行な日帰り旅。しかも、コロナ禍での観光名所＝京都見学ではありましたが、マスクを忘れない・密（密談状態）にならないなど、基本的な約束事を守っていれば大丈夫と思っていましたし、実際にスタッフの皆さんによる用意周到な安全対策もあって、全く心配なく楽しい一日があっという間に過ぎていきました。

須澤先生をはじめ、スタッフの名木様、金様、岩澤様に改めて感謝！申し上げます。（終）

☆

『失われた時を求めて』を読む

長谷川 修

昨春のコロナ感染対策で図書館が一斉休館になり読む本がなくて困った時、たまたまプールの『失われた時を求めて』を手にした。本書は世界有数の大長編小説で、原稿用紙で約1万枚、岩波文庫（吉川一義訳）で全14巻からなる。

岩波版は2010年から順次訳出・刊行され、足かけ10年で全巻が完結した。吉川氏の翻訳は、最近の新訳によく見られるような、訳注を付けず、原文の長い文章や段落をむやみに分割することは採らない。吉川訳では、訳注は見開き左ページで詳述し、名画や建造物の写真も多く挟んでおり充実している。訳文はプールの特有の長い文章の雰囲気を残し分割することは極力抑え、語順も原作者のイメージの展開に合わせ原文と同じ順に並べるような工夫をしている。

内容は、主人公である話者の少年期から晩年までの回想小説だが、波乱万丈の物語があるわけではない。19世紀末から20世紀初頭のパリを舞台に大勢の人物が登場する。貴族やブルジョワのサロンや別荘地において、恋愛（同性愛も含む）、芸術論（文学、絵画、音楽、演劇等）、政治事件、モード、料理等々多岐にわたる話題が延々と続く。そこでは表面的な出来事はともかく、主人公の精神の起伏や周りの人の心理が精緻に分析し描かれ、読む者の想像力は刺激される。

本書は急いで読むような小説ではないだろう。小生は当時のフランス社会に思いを馳せ、原作者と翻訳者の彫琢の文章を味わいつつ遅読を楽しんでいる。現在は第4巻を読んでいるが、あと2年位かけて最後まで読み了えたらと思っている。

理事会だより

☆お変わりなくお過ごしでしょうか。

日本文化塾も、コロナ禍の世間と同様活動を大きく妨げられた一年でした。昨年二月初から、新年度に予定していた諸企画をすべて見直さなければならなくなり、会員の皆様へのお知らせも、二転三転。只々、目の前のことに追われて時が過ぎました。小中高校の授業再開、飲食やスポーツ、一時は旅行も解禁となるなか、日本文化塾の核となる講演会活動は、最後まで実施することが叶わぬままです。

☆6月に予定していた『ゴジラからシンゴジラへ』は、オンライン講演会という形で、行うことができ、新しい方向への転機を見出すことにはなりましたが、何よりも、私共の活動は、この10年のおなじみとなった皆様方とお顔を合わせ、笑顔を交わすことが最も大切なことであるだけに、悔しさこの上ないことです。皆様からいただいたお年賀状やメールを読みながら、お一人おひとりのお顔を思い浮かべておりました。来年度からの活動をどうするか、役員一同話し合いを重ねる今日この頃です。

☆秋の見学旅行は、ちょうど感染の谷間にあたり、これ以上望めないほどのタイミングに恵まれました。参加されなかった皆様も、会員がお寄せくださった感想文と写真から、素晴らしい旅のひとつひとつを感じていただければ幸いです。

☆たいへん嬉しいニュースを一つ！一昨年度から大学院で学ばれていた足立尚子会員が、この度、めでたく修士号を取得されました。おめでとうございます。

(鈴木壽子・荒川順子・真野和子・須澤晃)



近世日光と申橋家の謎（五）

申橋家関係文書を読む

*無断転載を禁じます

VI 猿橋家の幕末

関東唯一の門跡寺院の主である輪王寺宮家に仕える猿橋家について、4回にわたり述べてきたが、今回は、幕藩体制が終焉に近づきつつあるなかで、家がどのような命運を辿ったのかに触れてみたい。

猿橋家9代隆恭は家で初めて官位を賜り、従五位伊豆守として、東叡山坊官を務めた。もともとその父は東叡山御用人奥野昌忠で、隆恭は江戸根岸に住んでいたが、1837（天保8）年、仕えていた第10代宮の命によって申橋家を継ぎ、日光在住となり、三代の宮に仕えた。妻は京都の中島家から嫁いでいるが、この人は、なんと夫死後三十年生きて81歳の天寿を全うしている。江戸の水が合ったのだろうか。

東叡山の寺領（知行地）については、詳しい研究がない。しかし、現長臈浦井正明氏によれば、寺域は30,1870坪余りとのことで、のちに山の北側の根岸寄りの台地が加えられたといい、上野の山は現在のように鶯谷駅側にかけての切り立った崖地ではなく、現在の常磐線外側あたりにかけての緩やかな地形だった。寺領は時代によるが、豊島郡と足立郡の計43村で、下谷辺りには貸家も多く抱えていたようだ。幕末時点では約350,000石の収入があったと考えられている。坂本、田端、新堀（日暮里）、金杉、中里、稲村、赤羽根の各村は比較的初期からの知行地で、その後谷中、重条（十条）以下時代を追って新知行地が広がった。（浦井正明『上野寛永寺將軍家の葬儀』2007,吉川弘文館による）

申橋家が江戸で与えられたのは金杉村根岸付近ということが分かっている。根岸と言えば江戸の人々が散策に出かける有名な場所で、鶯谷の豆腐料理「笹の雪」も今にまで知られている。宮はこの店に頻繁に出かけ、家臣たちも日ごろお供していたようだ。維新後、今後の身の振り方を話し合おうと家臣たちが集まったのはここであったとの記憶が、申橋家の人々には伝わっている。

さて、隆恭は1859年逝去し、跡を継いだのは主計長之助隆美（融次）であった。1867年（慶応3）京都において大政奉還を行った徳川慶喜は、翌年はじめ幕閣、近臣とともに海路大坂を脱出し、江戸に帰った。慶喜が朝敵とされて追手の新政府軍が江戸に攻め込もうとしたとき何が起きたのか、は周知のことなので、ここでは省略するが、江戸の町は戦火を免れたものの、慶喜が一時身を隠していた上野の山は、薩摩軍を核とする新政府軍の総攻撃を受けることになった。今でも、上野に行けば、当時の砲弾の跡を目にすることができる。彰義隊の墓もあるが、150年を過ぎては、だれもここで命を散らした人々のことは思わなくなった。明治政府が、山を接收後ここに作ろうとしたのは近代的な病院であり、紆余曲折を経て実現したのは、病院でなく、市民の安らぐ日本初の公園であった。

申橋家の話に戻ろう。10代隆美は、戦火が激しくなる前に、宮を守って上野を脱出した。弟の勇七も一緒である。敵軍が近づくなか、先導した幕臣に従い、少数の家臣は若き宮を女装させて、市谷自證院に向かった。市谷にも敵手が迫ったため、一行は降雨の泥道の中を東に向かったという。今市から日光に入るが、さらに旧幕府軍とともに会津に至ろうとしたとき幕府軍は降伏し、あるいは散り散りとなる中で、宮は捕縛されてしまう。申橋家の若い兄弟も、同じく拘束されて江戸に連れ戻されたと思われる。戦後、宮のお供をして戦った者たちがどうなったかは分からない。宮家の幕藩体制内の立場は將軍と対等で、（格式からみれば、將軍と「対座」であったので）家臣たちの受けた処罰もそれなりに重かったと思われるが、それ以上に彼らの誇りと、宮家へと幕府への忠誠心が強かったことは疑う余地もない。それゆえに、受けた衝撃の強さと心の傷の深さはいかばかりだったか想像に難くない。代々の墓所が日光観音寺であるにもかかわらず、隆美の墓が浅草長遠寺にあったのは、彼の江戸への思いの強さ故ではないだろうか。残念ながら、彼の歩みを知るすべはいまだに見つかっていない。弟の勇七は、その後、妻とともに後の日光金谷ホテルの経

営に携わっていくが、金谷ホテルのストーリーは、『金谷カッテージイン物語』（申橋弘之、2017、文芸春秋）に詳しく展開されているので、ぜひご一読いただきたい。（虎）

多くの旧譜代大名家と数万人と言われる幕府官僚とその関係者がどのようにして維新後を生き延びたのかについては、（最近でこそ家資料が日の目を見ることも増えているものの）まだまだ明らかになっていないことが多い。そのなかで、これも研究が十分進んでいるとは言えない東叡山寛永寺と日光に関する史実の一部が、輪王寺官家家臣猿橋氏のご子孫の地道なご努力によって、明らかにされたことは大きな進歩と言わなければならない。とくに、官家家臣家の紡いだストーリーを共有することは、一研究者にとって何よりも貴重である。今回不十分ではあるが、その一端を公にする仕事を日本文化塾が担えたことは感謝に耐えない。申橋家の資料は、当主申橋弘之氏から当文化塾に委託され、現在文化塾では、お預かりした資料を整理して、再度申橋家にお返しし、ご当家の史料館と言ってよい「日光侍屋敷」にお収めするべく努力を急いでいる。

☆NPO 法人には、収入の20%を一般からのご寄付で賄うという規定があります。

日本文化塾は、より多くの皆様のお支えをお待ちしております。

お申し込み・お問い合わせは→ secretary@nihonbunkajuku.org

編集後記